俺の憂鬱　彼女の秘密

馬喰 主水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の憂鬱　彼女の秘密

【Ｎコード】
Ｎ３８２７Ｃ

【作者名】
馬喰　主水

【あらすじ】
イジメに苦しむ陽一の日々は憂鬱そのもの。そんな生活を変えたのは一人の転校生。彼女のおかげで陽一の周囲は変わっていった。が、今度は助けてくれた彼女が狙われるという最悪の方向に変わってしまって…。

憂鬱日和・零

山形陽一の日常は憂鬱そのものだった。

高校受験に失敗し、適当に選んでしまった私立高校に入ってしまった事がそもそもの間違いだったと、彼は今にして思う。

さすがに滑り止めの高校ということもあって、周りの人間は自分より数段低脳な人間に見えた。だから交わらなかった、自分なりの自尊心の為に。そしてそれが仇となった。

彼はあっと言う間に、数人の不良（ワルガキ）によるイジメの的と化した。

それから毎日憂鬱、憂鬱、憂鬱…。ときに貶（けな）され、ときに殴られ、ときに辱（はずかし）められ、ときに搾取され…。

質の悪いことに、それらは全て秘密（ひみつ）裏に行われ、決して日の目を見ない“影の儀式”だった。

それに、例え誰かが見たとしても、誰も助けはしないだろう。彼には親しい友人も居ないのだから。

そんな彼の日常が、少し変化したのはその年の九月、未だ日差しの眩しい頃であった。

彼のクラスに、転校生が入って来たのだ。

一見して地味な少女、よく図書委員なんかをやっていそうな、内気で大人しい、そんなイメージの生徒だった。おそらく、数日も立てば存在すら忘れてしまいそうな、そんな女…そのときはそう思っていた。

しかし、後に彼女の手によって、陽一の周囲に劇的な変化が訪れるとは、このときは誰も、陽一本人さえも思いもしなかった…。

憂鬱日和・零（後書き）

初投稿、ヘタレ作品第一弾ですｗ

暇つぶしにでも読んで頂ければ幸いです

ｂｙ　バクロ　モンド

憂鬱日和・壱

「そうか、転校生なァ…。それで、山形クンは仲良うできそうか？」

西の訛(なまり)で話す白衣の女、カウンセラーの岸和田がコーヒーを片手に陽一に問う。

彼女は今年から、特別養護教諭として、生徒達の悩み相談を一手に請け負っている。あまり好ましい事ではないが、陽一は彼女の“常連”だった。

「さぁ、どうでしょうね。なんか大人しそうなヒトだったから、会話しづらいかも。それに…」

下手に動くと、またイジメのネタにされる…。

そう言おうとして、陽一は口をつぐんだ。まだ彼女にはイジメの事は告げていない。

毎回腹痛だの、耳鳴りだの、適当な理由を付けては彼女のもとを訪れる。彼女はいつもにこやかに、砂糖の多い甘めのホットコーヒーを手渡しつつ、どんな下らない話にも真摯に耳を傾けてくれる。それが心地よかった。

いっそイジメの事を話してしまおうか、そういつも思うのだが、話せない。話してしまえば、まるで罪人に対する尋問の如く、今までの体験を根掘り葉掘り問いただされるだろう。例え彼の為だとしても、決して楽しい行為ではない。

それに“イジメ”を忘れる為に訪れた先で、わざわざ“イジメ”を思い出さなくてはならないことは至極耐えがたいことだろう。だ

から、話さない。

「…それに、先に仲良くなるのは女子なんじゃないですか？」

ごまかした。いつもの事だ。

ま、そらそうやろなぁ、とコーヒーをすすりながら岸和田は微笑む。

「でも、その娘ちょっと暗そうやったんやろ？気ィ付けたりや？そういう娘って結構イジメられたりするから。先生も前の学校なんかで何人も見てるからなァ…」

「それなら大丈夫ですよ。」

今の“的”は俺だから…。心の中でそうつぶやいた。

「お、言うなァ少年！ほな任せたで？」

晴れやかな顔で陽一の肩を叩く。まだ若い岸和田先生は生徒と友人のようにコミュニケーションを取る。これももしかすると、カウンセリングの手法なのかもしれない、そう冷静に思いながらも、こういったスキンシップに飢えた陽一にとっては貴重なひとときだ。

そのとき、チャイムが鳴り響いた。五限目開始の予鈴、昼休みの終わりを告げる鐘だ。

「ほら、山形クン時間やで。さ、教室戻りィ。またいつでもおいでな。」

「はい、また来ますね。」

今日一番の作り笑いと共にカウンセリングルームを去る。また憂鬱な日常に連れ戻された訳だ。
授業中はまだいい。問題はその先、放課後だ。今日はどうやってやり過ごそうか、思考はそればかり考えている。いっそ死んでしまいたいとさえ思う。でも、その度胸は無い。そんな堂々めぐりを背負ったまま、彼は自分の教室に帰って行った。

一人カウンセリングルームに残った岸和田は、部屋中のカーテンを閉め、廊下を覗き、誰も居ないと判ると携帯を手に取った。アドレス帳の中から、『瞳』の名を選び出すと、もう一度周囲を確認してから受話ボタンを押した。ただの電話にしてはあまりにも用心深い。

無機質なコール音が鳴る。

…一回
…二回
…三回

四回目にさしかかったとき回線が繋がった。

「もしもし瞳？ウチや。仕事やねんけど今日から動けるか？…うん、アレはもう仕掛けとるから場所はわかる。あぁ、発見次第伝えよか？うん、わかった。それから、解ってるやろうけど、最初が肝心やからなァ…くれぐれもしくじりなや？」

終話ボタンを押す岸和田の顔からは、先ほどの笑みは微塵も感じられなかった。

憂鬱日和・弐

件(くだん)の転校生、確か後藤か佐藤かそんな感じの名前だった、は終始真面目に授業を受けていた。

6限目が終わった後も、あくまで優等生然とした態度は変わらなかった。そのせいか周りも声をかけづらいようで、必要なこと意外は話しかけないでいる。

多分、俺と同じ“人種”なんだな。

そんな風に陽一は思った。

それが証拠に、朝からたまに彼女の視線を感じる事がある。おそらく、互いに似たような認識を持ってるんだろうと、何となく思う。

「佐藤さん、ゴミ捨て場の位置、分かる？」

同じクラスの早乙女美紀が話しかける。生来のお節介焼きなんだろう、さっきから何かと転校生（“佐藤”で正しかったらしい）を気にかけている。

「…ううん、わからない。教えてくれる？」

「あ、だったらついてってあげるよ！」

しかし佐藤は首を横に振る。

「…迷惑だろうから、教えてくれるだけでいいの。ありがと。」

最後の“ありがと”に籠もった異様な語気にさしもの早乙女も怯んでしまったのだろう、ところどころどもりながら、ゴミ捨て場の位置を教えるのが精一杯だった。

必要な情報を手に入れた佐藤は、ゴミ袋を片手に、教室を出る。ドアをくぐるとき、一瞬、陽一と目があったような気がした。

ゴミ捨て場…、嫌な所だ。理由は単純、陽一に対するイジメは概して、校舎からの死角になっている“そこ”で行われるからだ。いわば“憂鬱”の生産工場、それが陽一にとってのゴミ捨て場だった。

そんなことを考えていたそのとき、

「山形みーっけ♪」

来た、岡島だ。

岡島俊樹。１７０センチ後半の長身に、髪型はブラウンのウルフベース、軽く着崩したブレザーと左耳の三連ピアスが特徴の男。クラスの盛り上げ役で成績は中の上、男女共に人気があり、教師にも多少やんちゃではあるが快活な生徒として認識されている。

しかし、陽一にとっては悪の権化でしかない。

“クラスの人気者”という肩書きは、狭い学生社会において絶大な権力になりえる。一度手にすれば、滅多な事では失墜せず、最も強大な発言力が手に入り、周囲の信頼も自然と高くなる。

彼は入学したての四月からその座に居座り、そのシステムを巧みに利用した。今ではこのクラスは彼を教祖とするカルト教団も同然だ、と陽一は思う。

だから、悟られない。

恐らくクラスメイトの何人かは、陽一がイジメを受けていることに何となく気付いてるだろう。しかし、その主犯格が岡島である、という考えにはたどり着かないに違いない。それもまた、“肩書き”の持つ固定概念の力だ。

「岡島君、今日も勉強会？」

「まぁね。一学期の物理ヤバかったからさぁ。」

詭弁だな。

クラスの女子と親しげに話す岡島を見ながら胸の内でつぶやく。

“勉強会”。なんと便利な言い訳だろう。片やクラスの人気者、片やジメジメガリベン君、そんな二人が連れ立って帰るのに、これほど相応しい大義名分が他にあろうか。以前から度々、岡島は“勉強会”と称し陽一で遊んでいる。

こうなると逃れる術は無い。

「期待してるぜ、先生？」

わざとらしく肩を組み岡島が微笑む。しかしその視線はとても冷たかった。

憂鬱日和・参

岡島に連れられて陽一がゴミ捨て場に着いたとき、そこには既に仲間が二人控えていた。桜庭と宮崎、よく岡島とつるみ、陽一をサンドバックよろしく扱ってくる、兎に角、嫌な奴らだ。

「おぉ、待ってたぜ“大先生”」

桜庭がわざと大げさに茶化す。口を開けば悪口雑言、嘲笑、罵声はお手の物、二枚舌どころか五、六枚はザラなのではないかとさえ思える。

コイツの言動は三人の中で1番ムカつく。そう思いつつも、陽一は何一つ言い返せない。弱いのだ、心が。

「遅ェよ…」

鈍い衝撃が陽一の腹部に伝わる。宮崎の拳が突き刺さっていた。基本的に、口より先に手が出るタイプの腕力バカなのだ。

コイツの行動は三人の中で1番ムカつく。そう思いつつも、陽一はやはり手が出せない。弱いのだ、腕っ節が。

地面に転がされる陽一、3人の蹴りが鍛冶屋の相槌のごとく降り懸かる。

さて、どうしたものか…。これから1時間、長ければ2時間以上の時間を耐え忍ばなくてはならない。

…と、思われたが、その日はすんなりと解放されることになった。ゴミ捨て場の陰に、佐藤が立っていたのだ。

「…何してるんですか？」

事務的な、抑揚のない平坦な声で、佐藤は彼らに問いかけた。

「あ？誰よ、コイツ」

桜庭が彼女を睨みつける。

「あぁ、先週来た転校生。カトーだっけ？」

「佐藤です」

岡島の問いに冷静に答える佐藤。

転校生なぁ、だから“空気読めない”のかねぇ？と桜庭はぼやいている。宮崎は腕を組んだまま終始無言だった。

「…で、何をしてるんですか？」

「何って？男の友情じゃね？」

岡島の答えに、桜庭が下卑た笑い声を上げる。

「そうは見えないのですが」

佐藤はあくまで冷静だった。止めに、人を呼びましょうか？と岡島に問い訊ねると、悪ガキ3人は不服そうな顔をしながらその場を立ち去った。

偶然に助けられた陽一は、裾の泥を払い落としながら立ち上がった。

「…あ、ありが…」

“ありがとう”。ただそう言いたいだけなのだが、自分と“同じ人種”に無様な姿をさらけ出してしまったことが恥ずかしく、上手く声にならなかった。

「…じゃあ」

陽一がお礼を言い終える前に、佐藤は踵を返し、校舎の方に消えていった。彼女の、肩まで伸びた黒髪が、夕日に照らされて綺麗だった。

よく考えれば、全く興味の無かった転校生と言葉を交わしたのも、しっかりと直視したのも、今が初めてだ。

明日はお礼を言おう、一応。

こんな人間的な事を考えたのも、この学校に入って初めてのことかもしれない。そう思いつつ、陽一は久々に穏やかな気持ちで家路についた。

ただ、陽一には一つだけ腑に落ちない事があった。なぜ、佐藤が、普段人気の全く無いゴミ捨て場に居たのか。

確かに、彼女は放課後の掃除の時間にゴミ捨てを任せられていた。

しかし、時間的に辻褄があわないのだ。教室からゴミ捨て場まで、大体8分程度でたどり着く。そして彼女は、陽一が岡島に連れられてゴミ捨て場に向かう5分ほど前に教室を出ている。転校生だから道に迷ったという可能性もあるが、見た感じ、佐藤はそんなミスを

犯すような人物には見えない。

仮にそうだったとしても、彼女は校舎側から現れるハズだ。しかし彼女はゴミ捨て場の裏手から現れた。

―まるで、陽一たちを待ち伏せているかのように…

…考えすぎだ。そんなことしたところで彼女にメリットは無い。だったら

偶然だろう

そう割り切ることにした。

憂鬱日和・肆

『シカト』という言葉はもともと花札に由来する。誰かがそう言っていたことを、今朝、教室に入ってから思い出した。

十月を示す紅葉の絵柄の札が四枚あるのだが、うち一枚に鹿の絵が描かれている。その鹿が後ろを振り返るようにそっぽを向いた絵柄なので、そういった態度を十月の鹿、つまりは『しか　とお』と言うようになったんだそうだ。

そういった雑学も含めて考えると、陽一にとって、今日の岡島は“鹿”そのものだった。いつもなら、脅しとも嘲笑ともとれるニヤけた笑みを浮かべるのだが、今日はこっちを見向きもしない。昼休みになった今でも、接触は全くない。普段なら一言、二言嫌味でも言ってくるだろうにそれも無い。まぁ、そのおかげで今日は、窓際の自分の席で黙々と昼食を口に出来るのだが。それでも、気にはなる。やはり原因は昨日の佐藤の一件か・・・。

理由はそれだけでは無いという予感がしていたが、それ以外に何も思い浮かばなかった。佐藤が他にも何かしたんだろうか…。

当の佐藤はというと、陽一の三つ前の席に座り、何やら一人で本を読んでいる。この距離では何の本かは判別できないが、少なくとも雑誌ではない。活字に埋め尽くされた小説か何か。普通の女子高生とは縁遠そうな、そんな本。普通とは違う佐藤は、普通とは違う本を読む。そんな言葉が頭をよぎった。

気が付くと、随分長い間佐藤の背中を見ていた。改めて見ると、佐藤は地味ながらも、かわいい部類に入るように思う。あくまで陽

一の主観だが。肩まで伸びた、やや明るい髪、華奢な背中、ページをめくる指先は、白く、しなやかだった。どうやら、昨日まで全く興味の無かった“転校生”は、いつの間にやら好奇心の対象にすり替わっていたようだ。
好奇心と言えば、気になるのは昨日の行動だ。たまたま居合わせただけなのだろうが、それでも、決して親しくもない陽一を、何故佐藤は助けたのか、それが不思議だった。考えうる可能性としては

1、彼女は人一倍正義感が強い
2、彼女は優しくてお人好し
3、彼女は陽一に好意を抱いている

…どれも有り得ないと思う。とはいえ、昨日までろくに彼女の事を気にかけていなかったのだから、まだハッキリとは否定できない。3番は論外としても、1や2の可能性はまだ十分にある。

しばらく、思考を巡らせてみる。そのとき、佐藤が急に振り返った。あわてて目を逸らす。ずっと眺めていたなんて事を悟られる訳にはいかなかった。
振り返った佐藤は、そのまま自身の斜め後ろに置いてあった鞄に手を入れ、携帯を取り出した。ランプが点滅している。耳に当てる様子がないことから、おそらくはメールだろう。
ひとしきりキーを操作し終わった佐藤は、携帯をポケットにしまい、すっと席を立った。そのまま、音も立てずに幽霊の如く、それでいて凛とした面持ちで騒がしい教室から抜け出した。

追いかけなくては

何故かは判らないが、陽一の頭に命令が下った。彼女の行く先が、何故か気になる。疑問に思う間もなく、陽一は少女の後を追ってい

た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3827c/

俺の憂鬱　彼女の秘密

2010年10月28日08時22分発行